

軽度知的障害のある自閉スペクトラム症者のキャリア・パースペクティブの形成プロセスに関する質的研究

松本 有希保

本研究では、「職業生活を中心とした生き方の実現可能性が加味された短期的・長期的見通し」と定義されるキャリア・パースペクティブを用い、障害者の自己理解に注目して、軽度知的障害のある自閉スペクトラム症者のキャリア・パースペクティブの内容、形成のプロセス、形成を促す支援のあり方を検討した。調査は2022年11月に、愛知県内の軽度知的障害のある自閉スペクトラム症者5名、職場においてその障害者を担当する支援者2名の計7名に半構造化面接により実施した。分析方法は、グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用し、本人と支援者についてそれぞれカテゴリー関連図を作成した。軽度知的障害のある自閉スペクトラム症者本人の分析の結果、状況として《障害特性による仕事の困難さ》、行為／相互行為として《周りからのサポート》【自己理解】《主体的な行動を起こす》《見習いたい人の存在》《周囲への不満》、帰結として《見通しの形成》《十分ではない見通し》の、8のカテゴリーが抽出された。また、支援者のデータの分析の結果、状況として《本人の働くことの難しさ》、行為／相互行為として《支援者が本人の状態を見極める》【支援者が行う本人への具体的な支援】《支援者から本人への期待》《支援者が本人との関係性を構築する》、帰結として《本人なりに考えた見通し》《十分ではない見通し》の、7のカテゴリーが抽出された。軽度知的障害のある自閉スペクトラム症者のカテゴリー関連図から、彼らの《見通しの形成》に直接つながる要因として《見習いたい存在》と《主体的な行動を起こす》の2つが見出された。本調査の結果、軽度知的障害のある自閉スペクトラム症者がキャリア・パースペクティブを持つことは可能であるが、現実的なところで長期的に将来を見通したり、過去の取り組み、現在の状況、将来の展望という見通しの連続性を持つことに困難があった。見通しの明確性は本人が体験の中で見出しやすく、さらに支援者から課題や目標を伝えられるなど支援によって目標が明確なものへとブラッシュアップされやすい。また、知的な障害のため自分自身で自己理解を深めることが難しく、自己理解が直接キャリア・パースペクティブの形成に結びつくことはなかった。だが自己理解ができていれば、キャリア・パースペクティブの形成につながりやすい《積極的な行動を起こす》事につながりやすく、同時に《十分でない見通し》の形成に結びつきにくいカテゴリーに移行するため、自己理解を深めることは、キャリア・パースペクティブの内容や程度をより良いものに調整する効果があることが明らかになった。また、支援への納得度や満足度が高いと、納得度の高い支援を行なった支援者が、本人にとってのキャリア・モデルになり得ることが示唆された。キャリア・モデルの存在は、実現可能性の高い長期的なキャリア・パースペクティブの形成要因になると考えられる。